

方針2 悠久の歴史を誇る熱田の魅力向上

悠久の歴史を誇る熱田神宮を中心とする熱田界隈について、尾張名古屋のルーツを物語るまちとして魅力の向上を図ります。

また、古代熱田と伝承でつながる上志段味や大高一帯について、その歴史的資源を活かしたまちづくりを推進します。

(1) 熱田界隈の重層的な歴史的資源を活かしたまちづくり

熱田神宮を中心に、門前町・宿場町・湊町・漁師町として多面的に発展してきた熱田界隈について、神宮・古墳・街道・宿場・湊・水辺・緑地などの多様で重層的な歴史的資源をつなぎ、尾張名古屋のルーツを物語る歴史集積を活かした拠点として再生します。

■拠点性の強化

- ・旧東海道や本町通、七里の渡し場跡、脇本陣格の旧旅籠など、往時の賑わいを今に伝える歴史的資源を活かしたまちづくりを推進し、賑わいと趣の感じられる空間形成に努めるとともに、鉄道駅周辺の大規模未利用地の活用を図るなど、界隈の拠点性を高めます。
- ・地域の大学などと連携してまちづくりの交流の場を設けるなど、地域・大学・行政の連携を図りながら歴史的魅力を活かした地域の活性化に取り組みます。

■回遊性の強化

- ・多様で重層的な歴史的資源をつなぐ散策ルートの設定や、案内板の拡充、歩行者空間等の整備、レンタサイクルの導入を検討するなど、熱田界隈を気軽に巡り、歩きまわりたくなる環境づくりを推進します。
- ・水辺（堀川・新堀川）や緑地（熱田の杜・白鳥庭園等）の保全・活用に取り組むなど、市街地内の豊かな自然環境を活かした界隈の魅力向上を図ります。



熱田の杜



熱田の浜 夕上り魚市（尾張名所図会）



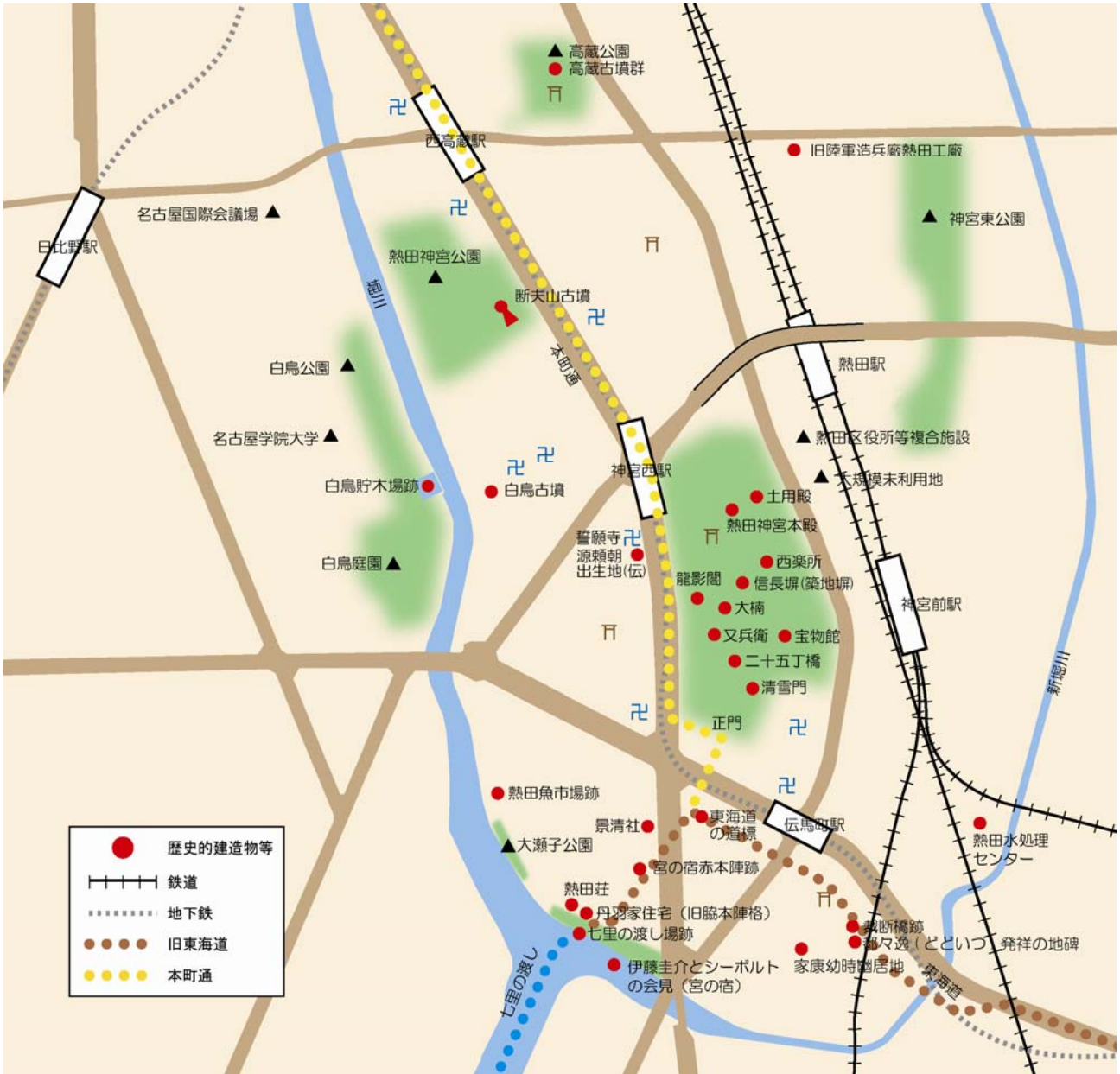
堀川端プロムナード



白鳥庭園



旧陸軍造兵廠熱田工廠



丹羽家（旧脇本陣格）



旧東海道の道標



七里の渡し場跡

歴史的資源の豆知識 【熱田神宮・断夫山古墳・七里の渡し場跡】

【熱田神宮と蓬莱島】

蓬莱島とは、中国の伝説で、東海中にあつて仙人が住み不老不死の地といわれる所。熱田神宮を蓬莱島とみる伝承は、すでに平安時代からある。わが国における蓬莱島伝承は各所にあるが、多くは秦の始皇帝と徐福の伝説であるが、熱田ではもっぱら玄宗と楊貴妃のことが語られている。玄宗が日本を攻め取らんとしたとき、熱田明神が美女と成つて玄宗の心を迷わせたとするのである。伊勢湾奥の鎮守の森を蓬莱島の聖地とする基盤のうえに、日本武尊が川上梟師を女装して討つたことが附会されたのであろう。近世にはこのことはよく知られ、「玄宗は尾張言葉にたらされる」などの川柳にもなっている。名古屋を蓬左というのは、京都からみて、熱田の左に位置するからである。また蓬莱島は亀の甲の上にあるということから、熱田神宮周辺の寺院は、山号に亀の字のつくところが多い。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）

【断夫山古墳】

熱田台地の西端に近く、かつては直下に海を望む位置に築かれた東海地方最大の前円後円墳である。全長 150m、後円部直径 80m、同高さ 13m、前方部幅 112m、同高さ 16m で、6 世紀初頭に築造された。

古代、この地方を支配した豪族「尾張氏」の墳墓であろう。長い間熱田神宮によって守られてきた。国指定史跡。

（名古屋市文化財保護室）



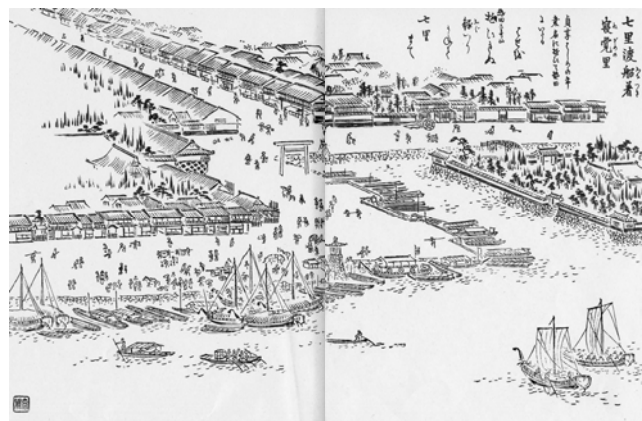
断夫山古墳

【七里の渡し場跡】

宮の宿から桑名の宿までは、東海道では唯一の海上路で、神戸の浜から桑名まで約七里あることから七里の渡しといわれ、また、間遠の渡しともいっていた。この船役は 360 人で須賀浦、大瀬子浦、東脇浦の三浦に住んでおり、朱印状を持つ者、大名、藩の公用の者などは無賃であるため船役は困窮することが多く、そこで船会所では旅人の賃金の 3 分の 1 を上米銭として公用の費用としていたが、延宝 3 年（1675）、船頭、水主らの保護として、熱田新田の東、船蔵の南に数十町の地を開墾させ、永代無年貢無役として 360 人の控とさせた。これが船方新田であるが、弘化元年（1844）作良新田を開発するに当たり、藩はこれを買収し、その利息として毎年 96 両づつ、後には 75 両余を下付し、これとともに年貢を徴収するようになった。水主の者は土地の返還を願ったが遂に許されなかった。

船数は多少の変化があつたが、75 艘が用意されていた。船賃は乗合で天和 2 年（1682）に 30 文、宝永 4 年（1707）に 45 文、文化年間（1804～18）には 54 文であつた。慶安 4 年（1651）以降は夜間の航行は禁止された。所要時間は 2 時間から 6 時間くらいであつたといわれている。砂洲の拡大、新田の開発で航路にも変遷があり、とくに新田開発はしばしば紛争となることがあつた。公認の七里の渡しのほかにも、黙認による四日市までの十里の渡しもあった。今は渡し場は七里の渡し公園として整備されている。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）



七里の渡し（尾張名所図会）

(2) 熱田ゆかりの地域の魅力向上

尾張氏ゆかりの神社や古墳群などが残る上志段味地区や、ヤマトタケル伝説にも伝えられる氷上姉子神社を有する大高一帯において、悠久の歴史ロマンが感じられるまちづくりを進めます。

■上志段味の魅力向上

- ・尾張戸神社や白鳥塚古墳をはじめとする古墳群等の古代の歴史的資源と、東谷山からの庄内川流域の眺望・河岸段丘・ため池・緑地といった豊かな自然環境を活かして保全していきます。
- ・国史跡の白鳥塚古墳をはじめ、上志段味地区に残る尾張氏ゆかりの古墳群については、豊かな自然のなかで河岸段丘とともに保存・活用しながら、「歴史の里」として整備を推進します。



● 古墳

○ 古墳群

歴史的資源の豆知識 【^{おわりべ}尾張戸神社と東谷山山頂の古墳について】

尾張戸神社は、創建の時期は定かではないが、「延喜式神名帳」に載る山田郡の古社。名古屋最高点である標高198mの東谷山山頂に鎮座する。社伝によれば、大永元(1521)年火災により焼失した後、尾張藩二代藩主光友によって、修造復興されたという。本殿は、古墳(尾張戸神社古墳 円墳)の上に建てられ、古代の豪族「尾張氏」の祖先神を祀る。

東谷山稜線上には、この古墳のほか、^{なかやしろ}中社古墳(前方後円墳)、南社古墳(円墳)が築かれている。いずれも4世紀後半に作られた名古屋最古のグループに属する古墳で、山麓の「白鳥塚古墳」とともに、「尾張氏」誕生の鍵を握る重要な古墳である。(名古屋市文化財保護室)

■大高の魅力向上

- ・起伏のある地形やまとまりのある緑地とともに、古代の伝承が残る氷上姉子神社、大高城跡・鷺津砦跡・丸根砦跡などの戦国時代の史跡を背景にもつ、旧大高集落に残る醸造蔵ひかみあねごのある町並みを活かした魅力あるまちづくりに努めます。
- ・未整備都市計画道路の見直しとともに、歴史的市街地における安心・安全なまちづくりへの取り組みを、地域と協力しながら進めます。



氷上姉子神社



大高斎田の御田植祭



大高城跡（国指定史跡）



醸造蔵



● 史跡等



醸造蔵のある町並み



未整備都市計画道路



大高城跡から望む

歴史的資源の豆知識 【氷上姉子神社】

氷上山と呼ぶ丘陵地にある。祭神は宮簀媛命^{みやずひめのみこと}で、熱田神宮の摂社である。
『延喜式神名帳』^{えんぎしきしんめいちょう}に火上姉子神社、『尾張国本国帳』^{おわりこくほんごちょう}に「従一位上氷上姉子天神」とある。寛平2年(890)の尾張国熱田大神宮縁起^{えんぎ}によれば、この地は尾張氏の旧里で、宮簀媛命^{みやずひめのみこと}もこの地において、その縁故により、ここに祀られたとされる。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)



氷上姉子神社

歴史的資源の豆知識 【大高城跡・鷺津砦跡・丸根砦跡】

【大高城跡】

永承年間(1504~21)の築城、城主は花井備中守と伝える。天文年間(1532~55)には水野忠氏父子の居城となる。水野氏ははじめ今川氏に、のち織田氏に属したため、永禄2年(1559)今川方の鳴海城主山口左馬助教継が攻略、今川義元は鶴殿氏にこの城を守らせた。鷺津・丸根の両砦は、これに対抗して信長が築いたものであるが、連絡を絶たれたこの城への松平元康(徳川家康)の兵糧入れはよく知られる。桶狭間合戦の折は元康が守っていたが、義元の敗死後三河へ戻り廃城となった。元和2年(1616)尾張藩士清水忠宗が城跡に屋敷を設けたが、明治3年廃された。国指定史跡。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)

【鷺津砦跡】

永禄2年(1559)、織田信長が今川義元に攻略された大高城に対抗するため、丸根砦とともに築き、飯尾近江守定宗らに守らせた。大高城の東北約700m、丸根砦の西北約400mに位置する。永禄3年5月19日、桶狭間合戦の緒戦に、今川方の朝比奈泰能に攻められて陥ち、定宗らは討死した。国指定史跡。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)

【丸根砦跡】

永禄3年(1560・永禄2年ともいう。)今川義元に攻略され奪われた大高城に対抗するため、織田信長が鷺津砦とともに築き、佐久間大学盛重に守らせた。同年5月18日、松平元康の鉄砲を用いた攻撃により陥ちた。大高城の東方約800m、鷺津砦の東南約400mの地点に位置する。国指定史跡。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)



鷺津砦跡



丸根砦跡

方針3 有松・堀川など「まち・むら」をつなぐ「道・水」を活かす

城下・熱田と街道等により結ばれた、特色ある「まち・むら」について、固有の歴史的資源を活かしたまちづくりを推進します。また、城下町を中心に周辺諸国や周辺の村々をつないだ街道や、暮らしを支えた河川や用水など、尾張名古屋をつなぐ歴史的な「道」や「水」のネットワークを継承し、まちづくりに活かしていきます。

(1) 尾張名古屋を彩る「まち・むら」の魅力向上

■有松の町並み・産業・文化の継承

- ・ 東海道の茶屋集落として古くから多くの人々が往来し、近世の町並み、産業（絞り）、文化（山車）を継承する有松周辺において、地域の歴史的資源を総合的に活用したまちづくりに取り組みます。
- ・ 江戸期からの伝統を伝える商家等の伝統的建造物が建ち並び旧東海道沿いの町並みについては、伝統的建造物群保存地区の導入を検討するなど、地域と行政が連携しながら持続的に町並みを保存・形成していくルールづくりに取り組みます。あわせて、住民や地域が主体となって個々の伝統的建造物を保存・活用していく仕組みづくりに取り組みます。
- ・ 旧東海道については、地域の協力のもと、電線類の地中化や道路舗装の更新を進め、歴史的町並みと調和した街路環境づくりに取り組みます。
- ・ 旧東海道の町並みに近接する地域においても、旧東海道の町並みと調和した景観形成を図ります。
- ・ 絞り、山車などの伝統産業・伝統文化を継承し、地域のまちづくりに活かします。





歴史的資源の豆知識 【有松の町並み】

有松は、旧東海道五十三次の池鯉鮒（知立）と鳴海の宿の間に、慶長13年（1608年）に開かれた村である。当初、尾張藩の奨励により、知多郡阿久比村から移住してきた人々は、両宿の間の茶屋集落として生計を立てていた。しかし、有松は、鳴海の宿にも近く、新開の村で耕地も少なく、茶屋集落としての発展には限界があった。

当時、名古屋城築造に従事していた九州豊後国（大分県南部）の人によって絞染めの技術が尾張の地にもたらされてきていた。一方、有松村民の元の居住地である阿久比村では、農家の副業として、手織木綿が産出されていた。この両者を結びつけて、有松絞を完成させたのが、当初の入植者の一人である竹田庄九郎であった。以降、有松は、絞染めと共に発展した。

有松絞は、尾張藩主にも献上され、藩の手厚い庇護の下にめざましい発展をとげた。そして、その名は全国に知られることになり、有松は、隣の本宿の鳴海にも勝る繁栄ぶりをみせた。

ところが、天明4年（1784年）、大火が起こって、全村のほとんどが焼失した。この時も、藩からは援助の手がさしのべられ、有松は、大火後20年ほどでほとんど復興した。これを機に、旧東海道沿いの町家は、従来の萱葺を瓦葺に改め卯建を設け、構造も塗籠造りとしたことから、現在見られるような豪壮な商家が建ち並ぶ町並みが形成された。

絞の販売は、江戸時代には、旅人を対象にした店頭販売が盛んであったが、幕末から明治にかけて、絞商の多くは、全国に販路を求めて卸問屋へ転身し、明治末期に大いに繁栄した。その後有松は、大正期から昭和初期、そして戦後と、その時々々の景気の動向や戦時統制に強く左右されてきたが、有松絞は今も伝統産業として栄えている。

現在、絞染めに関連した用途の建物は、往時に比べると数少なくなっているが、その繁栄の歴史を今に伝える町並みが、旧東海道沿いを中心に残されている。

■鳴海界隈の魅力向上

- ・ 東海道の宿場町として古くから多くの人々が往来した旧鳴海宿の周辺においては、宿場町の面影を残す旧東海道沿いの町並みや、城跡や芭蕉ゆかりの地等の史跡、寺社地等の緑や扇川などの豊かな自然環境など、一帯に残る多様な歴史的資源を活かした界隈の魅力向上に努めます。
- ・ 旧東海道に近接する鳴海駅前においては、周辺の歴史的環境にも配慮しながら、市街地再開発事業の推進等による地域の拠点形成を図るなど、地域の実生活利便性を高めます。
- ・ 絞り、山車などの伝統産業・伝統文化を継承し、地域のまちづくりに活かします。



鳴海の町並み



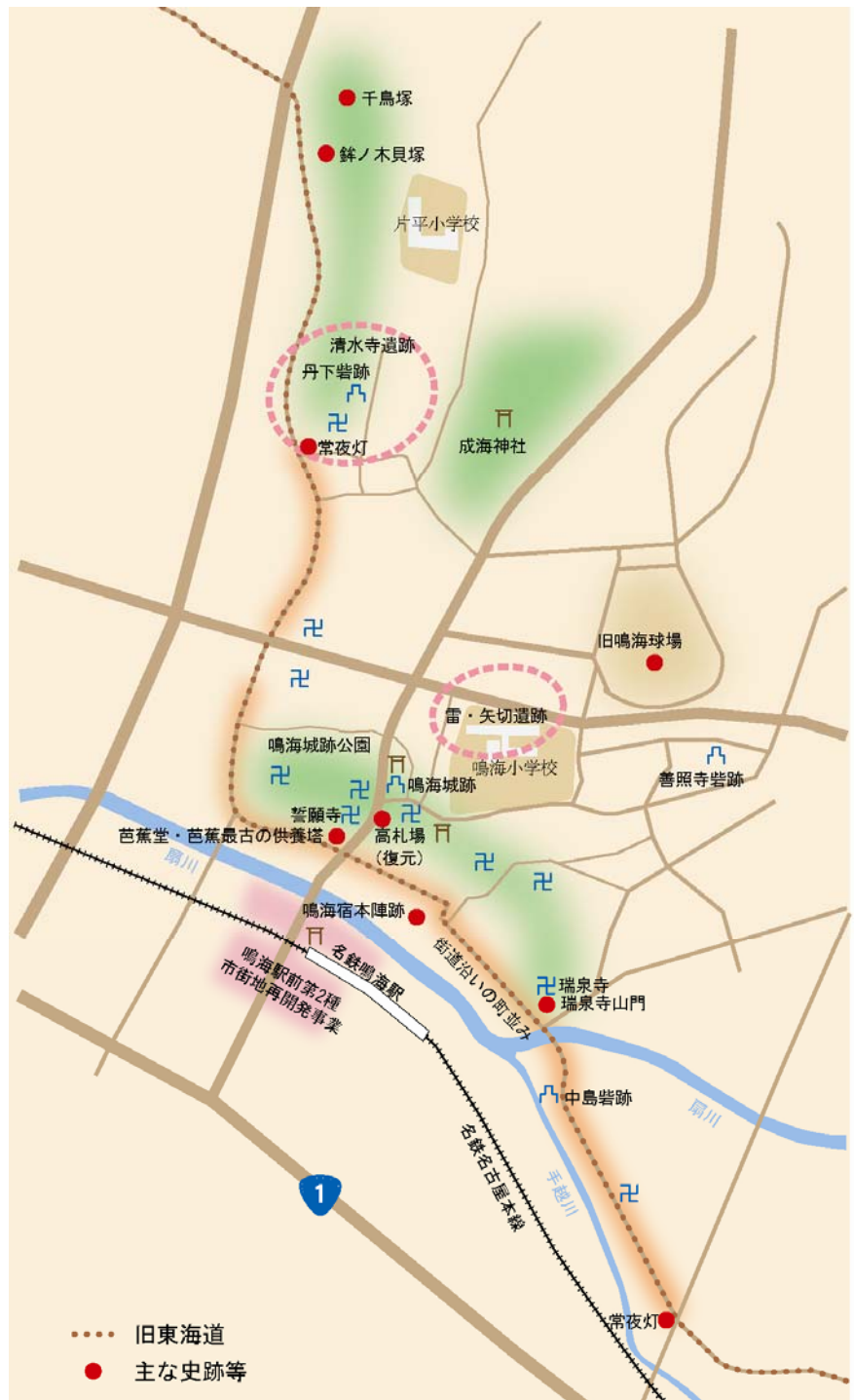
成海神社



鳴海城跡



常夜灯と町並み



歴史的資源の豆知識 【成海神社・鳴海城跡・芭蕉堂・芭蕉最古の供養塔】

【成海神社】

祭神は日本武尊・宮簀媛命・建稻種命。『延喜式神名帳』に「成海神社」、『尾張国本國帳』に「從三位上成海天神」とある。社伝によれば、朱鳥元年（686）の鎮座と言ひ、古くは現在地の南方天神山に位置したが、応永年間（1394～1428）現在地に遷したという。今川義元は弘治3年（1557）当社の社領安堵の朱印状を与えた。現本殿は棟札にあるように延宝5年（1677）の建立と見られる。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）

【鳴海城跡】

標高20mの丘上にある。『寛文村々覚書』によれば、東西92間（約166m）南北20間（36m）。根古屋城ともいわれた。応永年中（1394～1428）安原宗範の築城と伝えられる。織田信秀はここに山口左馬助教継、九郎二郎父子を置いたが、山口父子は今川義元側につき、永禄2年（1559）大高城を攻めている。翌3年の桶狭間合戦では今川氏の猛将岡部元信がこの城に配され、義元が討たれた後も最後まで立てこもって奮戦した。その後佐久間信盛、正勝らが城主となったが、天正18年（1590）廃城となったと伝えられる。『尾張志』は、東西75間、南北34間で、4面に堀跡、本丸と二之丸の境にも堀を残すと記し、大正年間までは堀と土塁が残っていたという。

鳴海城の当時の様子については、蓬左文庫にある古絵図によって推定することができる。これによると、城の郭は現保健所のあたりを本丸とし、南の円竜寺のあるあたりまで広がっている。円竜寺の本堂の再建にともなって発掘調査が行われたが、その際に濠の一部が検出されたほか、瓦を根石代わりに詰めた柱跡、瓦溜まりが検出された。このうち濠は、本丸と二之丸の間の濠と考えられる。

一方、保健所の北西の崖面からも古い瓦片が若干採集されている。軒丸瓦でみると、奈良～平安時代に属し、先の瓦溜まりの瓦とともにこの時期にここに寺院が造営されていた証拠と考えられる。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）

【芭蕉堂・芭蕉最古の供養塔（誓願寺）】

誓願寺の芭蕉堂は安政5年（1858）冬に、竹有の門人で、永井荷風の祖父にあたる永井士前が建てたもの。本尊の芭蕉像は、寛政3年（1791）の台風で倒れた細根山の芭蕉手植えの杉の古木を、大高の墨山が乞い得て二体を刻み、その一体は井上士朗によって名古屋下日置の東輪寺に納められ、またその余材で嘉右エ門という人が彫刻したのがこれであるという。堂の台座の下に建立者の士前等十数人の名が書かれている。また吞舟和尚と蒼虬筆の扁額2枚が現存している。

芭蕉最古の供養塔は芭蕉堂の脇にあり、青石の自然石に「芭蕉翁」、裏面に「元禄7（1694）年甲戌10月12日」と没年月日が刻まれる。その翌月の忌日には鳴海連衆の手によって如風和尚の如意寺で追悼会が催され、建碑されたものだが、のちに下郷家の菩提寺に移されたという。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）



芭蕉堂



芭蕉最古の供養塔

■笠寺界隈の魅力向上

- ・ 門前町として発展した笠寺界隈においては、尾張四観音の一つとして中世からの歴史を伝える笠寺観音をはじめ、笠寺一里塚、見晴台遺跡など、一帯に残る多様な歴史的資源を活かした界隈の魅力向上に努めます。
- ・ 笠寺公園にある見晴台遺跡は、長年にわたり市民参加による発掘調査を実施しており、見晴台考古資料館の調査研究・展示活動を通じて笠寺界隈の魅力ある歴史情報の発信に努めます。



街道沿いの町並み



歴史的資源の豆知識 【尾張四観音】

名古屋城下の周囲を取り囲むように、西北の甚目寺、東北の龍泉寺、東南の笠覆寺、西南の観音寺の4つの古い寺がある。いずれも観音像を本尊としており、総称して尾張四観音と呼ばれている。

これらの寺々では毎年恵方を定め、2月の節分には盛大な豆まきが行われて、多くの参詣者を集めている。

【甚目寺】

縁起による創建は「推古天皇5(597)年、伊勢の甚目龍麻呂という漁師が海中より紫金の聖観音菩薩を網にかけ、近くに一草堂を建て甚目寺と名付けておまつりした」とされている。発掘調査では白鳳時代(7世紀後半)の単弁蓮華文軒丸瓦などが発見されている。三重塔・南大門・東門、不動尊像・仏涅槃図の国指定重要文化財をはじめとして多くの寺宝が伝わる。

(あま市役所)

【笠覆寺(笠寺観音)】

天平年間(729~749)禅光上人の開基、初め小松寺とあったが、延長年間(923~931)藤原兼平が堂宇を再興して今の寺名とした。当寺には国の重要文化財、県指定文化財等多くの文化財を蔵する。

【観音寺(荒子観音)】

天平元年(729)僧泰澄(たいちょう)の草創と伝え、往古は群中無双の霊場とされたが、後衰退し、現在地より北の高畑村にあったという。永禄年間(1558~70)全運が再興。天正4年(1576)前田利家により修造されたという。

境内の多宝塔は天文5年(1536)の再建で、国指定重要文化財。市内最古の木造建築物で円空仏1250体余を所蔵している。

【龍泉寺】

伝教大師の創建といわれ、青銅造馬頭観音像を本尊とする。天正12年(1584)長久手の役で戦火のため焼失し、慶長年間(1596~1615)秀純和尚が再興した。仁王門と木造地藏菩薩立像は国の重要文化財に指定されているほか、多数の円空仏を蔵することで名高い。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)



■荒子界隈の魅力向上

- ・中世の時代に開墾された農村として、また荒子観音の門前町として古くから集落を形成してきた荒子界隈においては、市内最古の建造物や多数の円空仏を有する荒子観音をはじめ、前田家ゆかりの荒子城跡など数多くの歴史的資源があります。それらの歴史的資源の集積を活かしたまちづくりを推進します。
- ・また、鉄道事業者等と連携して歴史的資源を巡るウォーキングを開催するなど、複数の鉄道駅に近接した立地を活かしたまちづくりを促進します。



古くからの集落



前田利家像（荒子駅前）



観音寺多宝塔



円空仏

歴史的資源の豆知識 【荒子城跡】

前田利家の父利昌の築城と伝えられている。利昌は二千貫の地を領して当城に住み、利家の兄利久、利家、その子利長と嗣いだが、天正3年（1575）織田信長により利家が越前国府中に封ぜられ、同9年には利長も府中に転じて廃城となったとされている。『寛文村々覚書』によれば、東西約68m、南北約50mであったが、この頃すでに畠となっていた。現在宅地・耕地化によって城跡は詳かでないが、かつては西に城濠の跡とつたえる小川があり、これに架る橋を古城橋と称していた。ここを前田利家の出生地とする説もあるが、確証はない。

（「名古屋の史跡と文化財（新訂版）（平成3年）」などより）



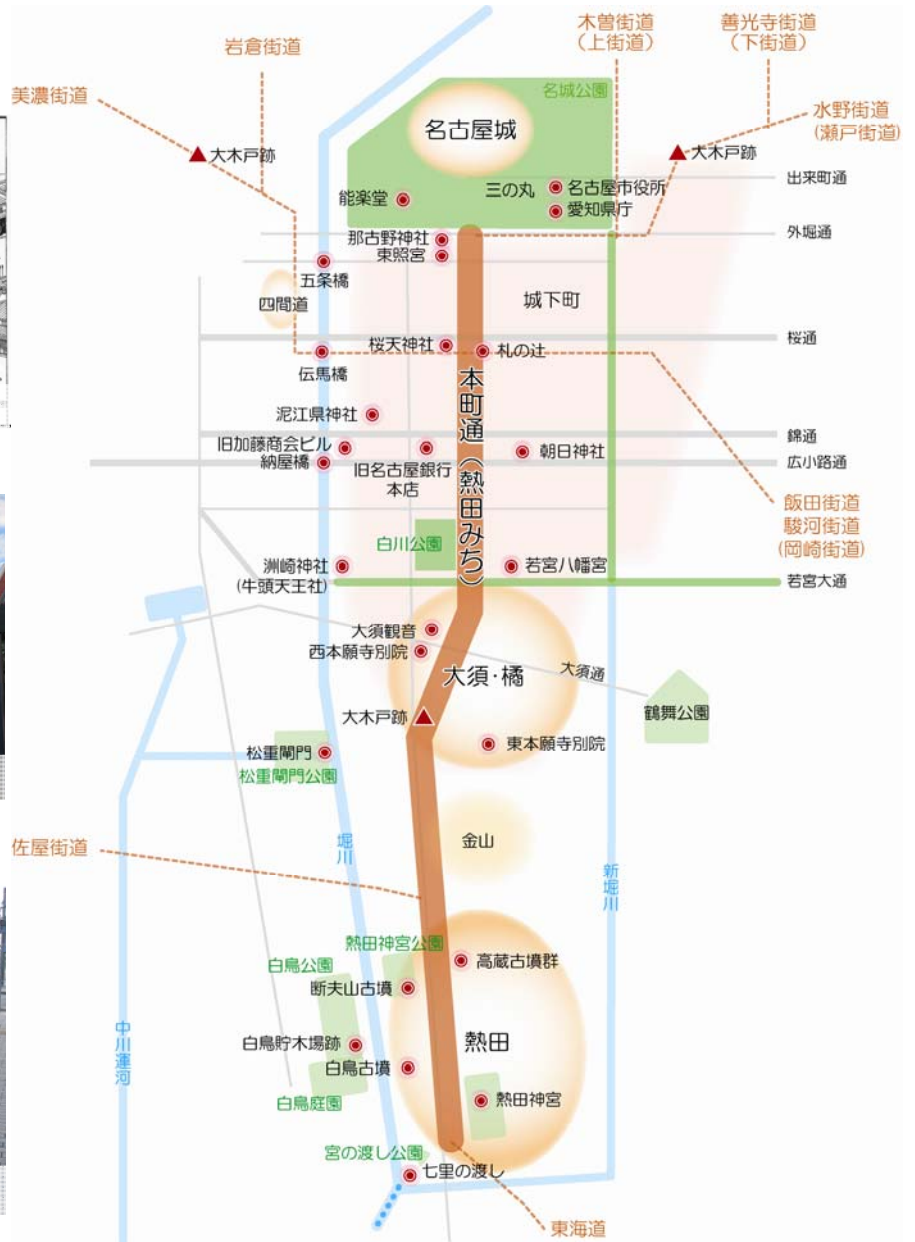
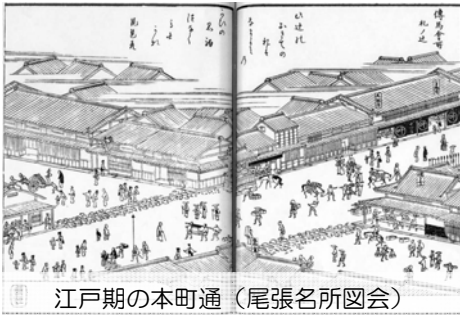
天満天神宮

(2) 道の歴史を活かしたまちづくり

城下と熱田を結んだ本町通や、周辺の諸国や村々をつないだ街道の歴史を継承し、道を通じて身近に歴史が感じられるまちづくりを推進します。

■本町通における歴史の見える化の推進

- ・城下町の町割の中心軸であるとともに、城下町と宮の宿（東海道）とを結ぶ道として重要な役割を担ってきた本町通において、歴史の見える化を推進します。
- ・既存のサインの整理や、旧町名・旧通り名のプレートや道標の設置等を検討するなど、城下町の骨格としてまちを支えてきた歴史を伝えていきます。
- ・歴史の見える化にあたっては、本町通と並行して城下町と宮の宿（東海道）をつなぐ都市軸として城下町を支えてきた堀川におけるまちづくりとの連携を図りながらすすめます。



■東海道における「歴史みちづくり」の推進

- ・江戸期の東西交通の大動脈であり、城下町～熱田と周辺諸国を結んだ旧東海道においては、江戸期の面影を残す街道・沿道の歴史的環境の継承・再生や、街道周辺の豊富な史跡や文化を活かしたまちづくりを推進します。
- ・江戸期の面影を残した沿道の景観や、周辺の豊富な史跡や伝統文化などを活かした、歩いて楽しい道づくりを推進します。
- ・既存のサインの整理や、旧東海道の歴史を物語るプレートの設置を検討するなど、旧東海道らしさや一体感の演出を図ります。
- ・歩行者ゾーンの明確化や、コミュニティ道路の導入等による通過交通の制御についても検討しながら、歩行環境の改善を図ります。



笠寺



鳴海



有松

歴史的資源の豆知識 【笠寺一里塚】

名古屋市内旧東海道の唯一の一里塚である。一里塚は道程一里(約 4km)毎に塚を築きその中央に榎などを植えたものである。街道の左右に設け旅人に距離を示しただけでなく、荷物その他運賃計算の基準にもなった。

笠寺観音から東南約 600m、道の東側に直径約 10m の円丘がある。これが一里塚で、高さ約 2~3m の土盛りの塚。中央の榎は老木で幹の一部が空洞になっている。西側の一里塚は取り壊された。江戸から 88 里にあたる。

(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)



笠寺一里塚

歴史的資源の豆知識 【あゆち潟】

年魚市(あゆち)潟は、鳴海から熱田にかけての海辺の湾入した遠浅の地形をさしていったようである。万葉集の歌枕として名高く「年魚市潟 汐干にけらし 知多の浦に 朝漕ぐ船も 沖に寄る見ゆ」「桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市潟 汐干にけらし 鶴鳴きわたる」が代表的な歌となっている。

「あゆち」は「あいち」と転じ、県名の語源となったと言われる。また「あゆ」は東風とか湧き出るとかの語意があり、東風の吹く所とする説、湧水に富む所とする説などがある。

南区岩戸町の白毫寺の境内は、かつての年魚市潟を展望できる場所の一つとして残り、その一部が市指定の名勝となっている。境内には勝景址の碑や黒田清綱の歌碑、芭蕉の句碑などがある。今は陸地と化したのが、古代から景勝地として、万葉歌人などが歌を詠んだところである。

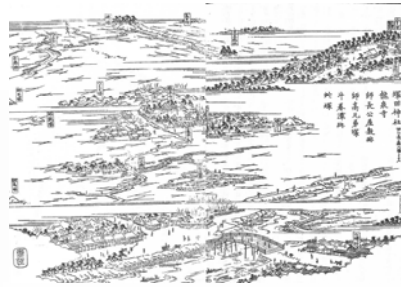
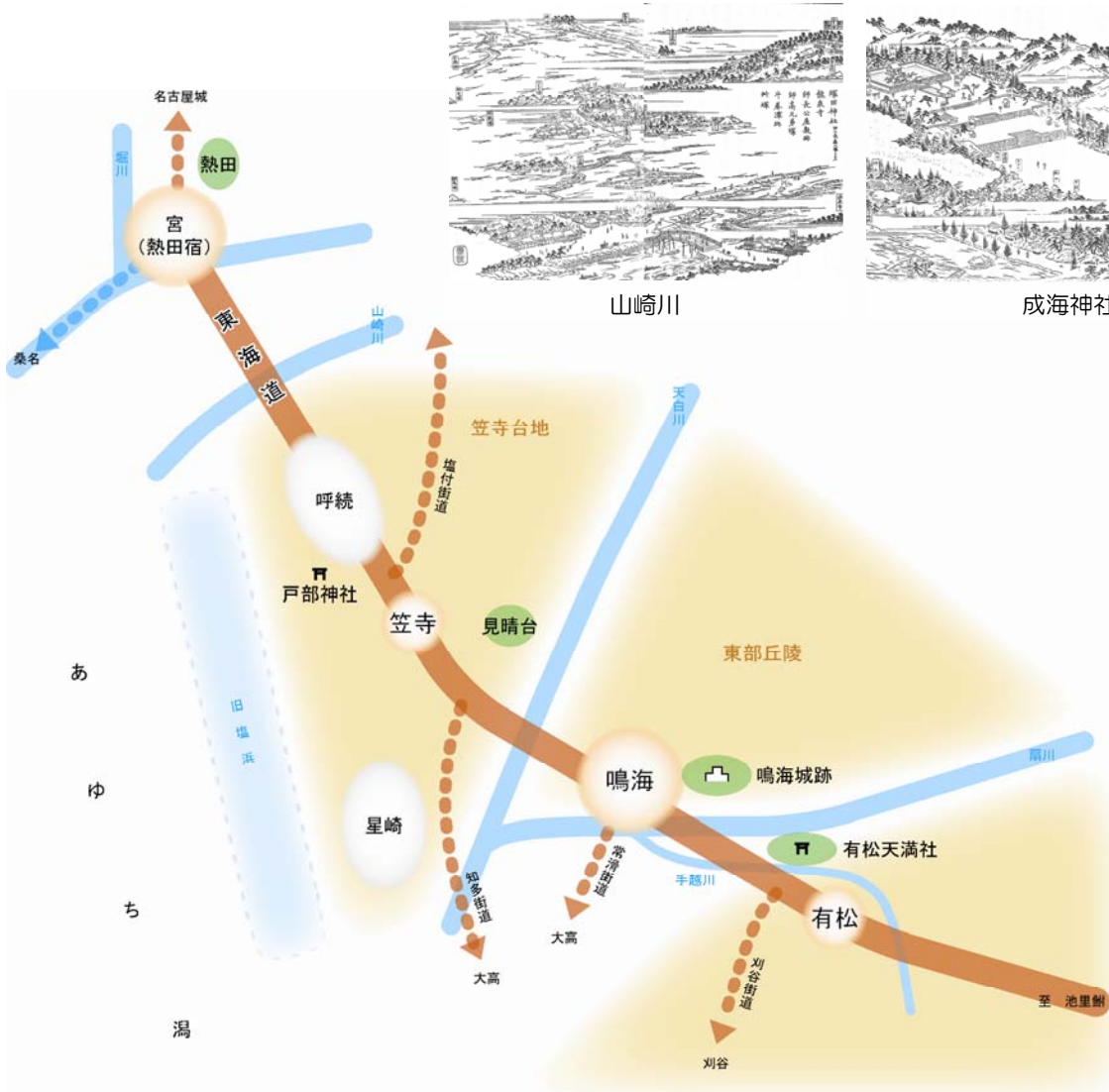
(「名古屋の史跡と文化財(新訂版)(平成3年)」などより)



笠寺観音



星崎



山崎川



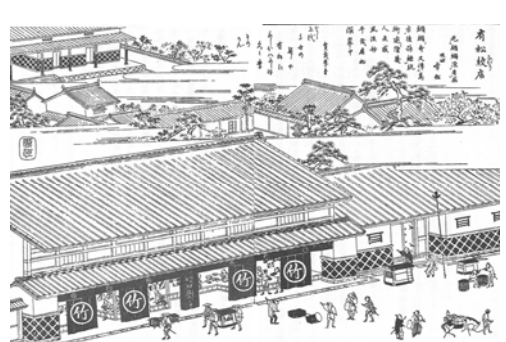
成海神社



星の宮(星崎)



瑞泉寺(鳴海)



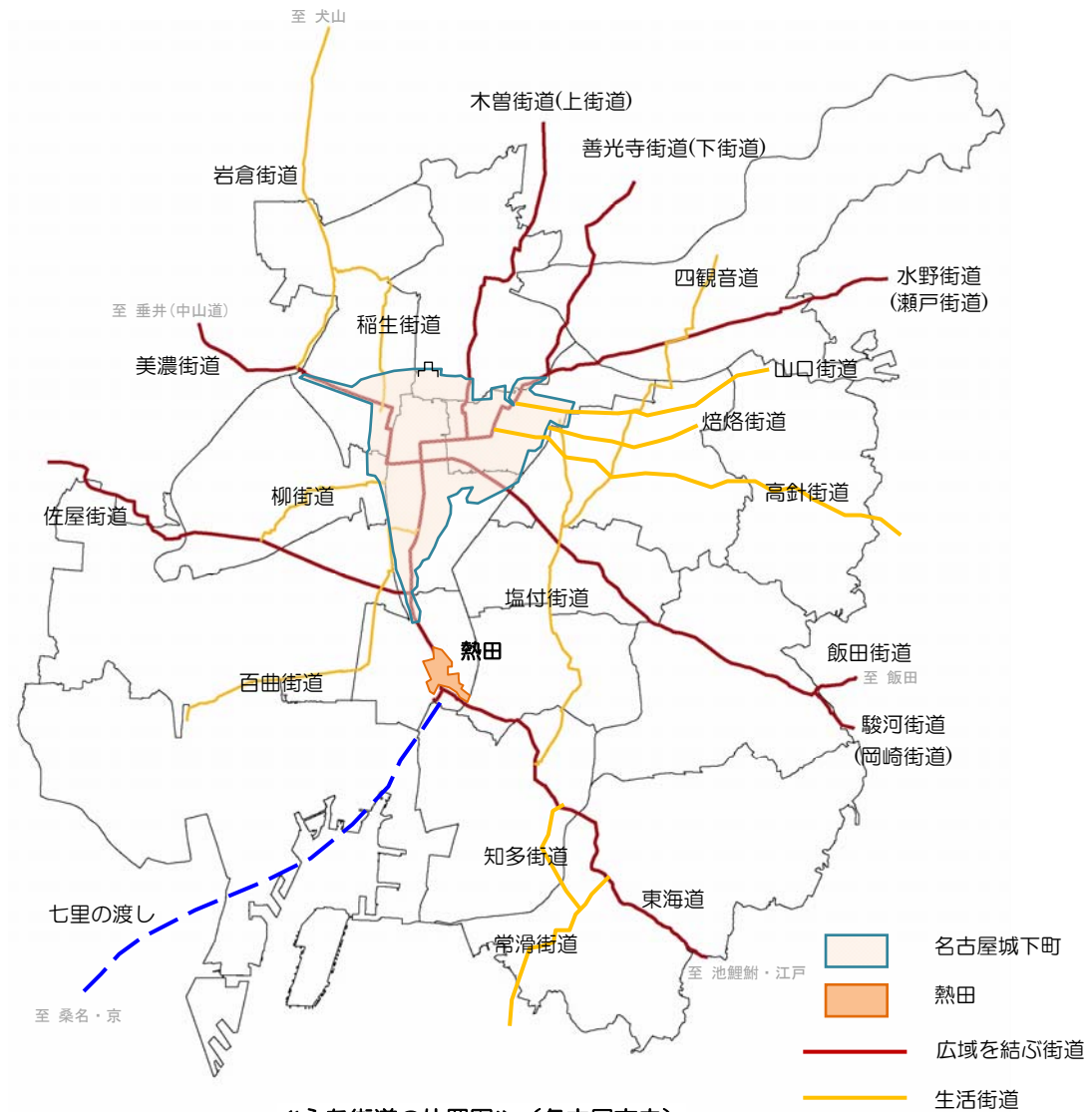
有松

■街道の歴史を活かしたまちづくり

- ・街道にまつわる歴史的資源の保存・活用を図ります。
- ・街道沿いにおいて、街道の歴史を語る案内板等の充実や、地域と協力しながら歴史的風合いの感じられる道路環境の整備（コミュニティ道路・緑道の整備など）を図るなど、歴史が感じられる道づくりを推進します。
- ・街道沿道の史跡、歴史的建造物、レトロな風景などの歴史的資源を活かすなど、沿道の歴史的環境づくりに取り組みます。
- ・街道でつながる歴史・文化を共有する周辺市町村と連携するなど、街道を介した都市間交流を促進します。



佐屋街道案内板



《主な街道の位置図》(名古屋市内)

(3) 水の歴史を活かしたまちづくり

城下町と熱田（湊）をつなぎ、城下町の物流・生活文化を支えた「名古屋の母なる川、堀川」を「うるおいと活気の都市軸」として再生します。また、河川・用水・ため池・井戸など、城下と周辺の村々の暮らしを支えてきた水のネットワークを継承・再生し、歴史が感じられる水辺環境の形成を推進します。

■堀川の再生

- ・材木、塩や年貢米をはじめ、名古屋城下の物流をになうと共に、花見や舟遊びを楽しむ憩いの場所であった堀川について、黒川樋門・松重閘門・物揚場石畳・白鳥貯木場水門などの歴史的資産の保存・活用を図り、堀川とともに歩んだ名古屋の歴史を次世代に伝えます。
- ・堀川開削以来の長い歴史を持つ五条橋、納屋橋などや、明治期以降の産業都市化を支えた岩井橋や住吉橋などの橋梁については、それぞれの独特の意匠の継承・修景を図るなど、歴史が感じられる水辺景観の形成に努めます。
- ・市民と連携した水辺文化（熱田まつり、堀川まつり〈まきわら船〉など）の復興と継承を図ります。
- ・庄内川等からの導水、下水道の整備、ヘドロの除去などにより河川水質の浄化を図り、河川環境を改善します。
- ・親水広場や遊歩道（リバーウォーク）の整備を進めつつ、水辺に容易に近づける歩行者通路などを敷地内や建物内に確保するなど、堀川へのアクセス性を高め、河川空間との一体感の創出に努めます。
- ・納屋橋周辺については、親水広場や遊歩道をオープンカフェやイベントなどの賑わいと憩いの空間として活用するなど、都心の水辺空間における活動の多様性を拡大します。
- ・堀川に顔を向けた土地利用を誘導・促進（堀川を望むテラスを設置した飲食店など）し、水辺がより身近に感じられるまちづくりを進めると共に、四間道界限などの歴史的資源を活かし、趣のある沿岸のまちづくりを進めます。
- ・旧城下と熱田を結ぶ観光航路としての河川利用を促進するなど、水運を活かしたにぎわいづくりを推進します。また、七里の渡しで結ばれた桑名との結びつきを意識した広域的な連携に取り組みます。

歴史的資源の豆知識 【黒川の開削・埋立てによる下流部の延伸】

開削当時（慶長 15 年(1610)）の堀川は、名古屋城西の幅下から熱田まででした。

明治9～10 年(1876～1877)に犬山と名古屋をむすぶ舟運と農業用水の取水を目的に、守山区水分橋で庄内川から分岐し、矢田川の下を伏越し堀川にそそぐ川（この川は担当した技師、黒川治愿の名前から「黒川」と呼ばれています。）がつくられました。

明治 16 年(1883)には新木津用水が改修され、従来は木曾川経由で 7 日かかって輸送されていたのがわずか 4 時間に短縮され、明治 19 年(1886)から大正 13 年(1924)までは、愛船株式会社による運送事業が行われていました。下流では江戸時代には新田開発、明治以降の名古屋港の築造、工業用地の造成のために埋立てが行われ、これに伴い堀川も延伸され、現在の姿になりました。

（「堀川の歴史」リーフレットより）



もとより
元杵樋門

※かつてこの樋門の中を、荷物を満載した舟が行き来していました。



堀割を意識した広場整備



納屋橋



まさわら船



黒川樋門（再建）



北清水親水広場



岩井橋



堀川と沿岸の店舗



納屋橋と旧加藤商会ビル



船着場（納屋橋）



名古屋名所団扇絵「堀川 花盛」



■河川・用水の歴史を活かしたまちづくり

- ・古くから暮らしを支えてきたため池や農業用水路については、市民の多目的なレクリエーションの場として活用できるよう、保全・整備に努めます。
- ・市内各所に残る井戸について、水質や施設の維持に努め、その役割を継承します。また、災害応急用協力井戸の指定等を通じて、地域防災に活用します。



庄内用水



ため池（荒池）



《江戸前期の主な河川・用水の位置図》 「なごや水物語」より作成